

佐賀大学地域学歴史文化研究センター
自己点検・評価報告書
(平成 29 年度)

平成 30 年 12 月

29 年度の活動に関する自己評価

(1)教育

- ア) 教養教育を所管する全学教育機構との連携をすすめた。具体的にはインターフェース科目「佐賀の歴史と文化」企画・担当である。
- イ) 上記のほかeラーニングなど、学内他部局と連携し教育活動を実施した。
- ウ) センター内に閲覧室を設け、歴史・文化・郷土史関係の書籍・資料を約 2,400 点配置し、学生・市民の利用に供したほか、研究成果を展示室にて公開した。
- エ) 公開講座「佐賀学のススメ」を開講し、市民向けの地域学教育を図った。
- オ) 佐賀県立図書館との共催で市民向けの古文書講座を 10 回開催した。
- カ) 佐賀市立図書館と共催公開講座「私が教えた佐賀の歴史と文化 100 分集中講義」を 3 回開催した。
- キ) 研究成果を学生向けに発信するため、美術館小展示室にて「地域の文化財群としての小城鍋島文庫蔵書」展を開催し、教員の授業に用いた。

〈自己評価〉

本センターは設立以来、研究成果を教育活動へ活用してきた。大学教養教育における地域学教育を構想し、上記の通り全学教育機構との連携を図った。

社会教育の面では、市民参加型の古文書講座や公開講座を自治体と共催などにより開催し、地域学の有効性や史料保存の重要性について、市民の理解が深まるよう努めた。

(2)研究

- ア) 佐賀大学附属図書館所蔵「小城鍋島文庫」の歴史関連資料から、小城藩初代藩主鍋島元茂に関する研究をすすめ(2017 年は、小城藩が成立してちょうど 400 年)、成果を小城市との共催展「鍋島元茂一父を支え、小城を領すー」を開催して市民に還元したほか、研究図録を刊行した。
- イ) 地域学歴史文化研究センターで収集した史料の研究・公開推進のため、『阿蘭陀使節船渡来』を、低平地研究会と共同で刊行した。
- ウ) 地域学研究の基礎的情報を蓄積するため、野中家・山本家の史料調査を実施した。
- エ) 第 10 回地域学シンポジウム「肥前鍋島家の文雅」を開催した。
- オ) 第 7 回在来知歴史学国際シンポジウムを後援した。
- カ) 第 11 回地域学シンポジウム「野中家資料の世界」を開催した。
- キ) 所属教職員のほか、佐賀地域歴史文化に関する学外研究者の成果をまとめた研究紀要第 12 号を刊行した。
- ク) 佐賀学ブックレット第 6 冊『佐賀城下にあった幻の大名庭園—観頤荘』を刊行した。

ケ)小城藩日記データベースの作成をすすめ、未完成ではあるが一部公開を開始した。

コ)伊藤昭弘准教授は基盤研究(B)「佐賀藩薬種商・野中家資料の総合研究」(研究代表者、平成 28~30 年度、29 年度 3,800 千円)、基盤研究(S)「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立」(研究分担者、平成 26~30 年度、29 年度 70 千円)、基盤研究(B)「日本列島における鷹・鷹場と環境に関する研究」(研究分担者、平成 28~32 年度、29 年度 80 千円)、国立歴史民俗博物館総合資料学奨励研究「地域歴史資料の研究利用促進に向けた環境整備」(研究代表者、平成 29 年度、697 千円)を獲得した。三ツ松誠講師は若手研究(B)「国学者西川須賀雄と神道国教化の時代」(研究代表者、平成 29~32 年度、29 年度 900 千円)、を獲得した。ほか特命教員・非常勤研究員も科研費を獲得している。

〈自己評価〉

本年度もさまざまな分野で研究成果を挙げることができた。外部資金も豊富にあり、センターの研究活動を支えた。

(3)国際交流・地域貢献

ア)小城市教育委員会との共催展「鍋島元茂一父を支え、小城を領すー」を開催し、佐賀大学附属図書館『小城鍋島文庫』の研究のほか、センターにおける研究成果を市民に公開した。

イ)上記共催展に伴い講演会を 2 回開催した。

ウ)佐賀県との共催古文書講座を開催した。

エ)佐賀市との共催公開講座を開催した。

オ)「佐賀県歴史データベース」により山本家文書など佐賀県関係古文書のデータを公開した。

カ)公開講座「佐賀学のススメ」を 6 回企画・開催した。

キ)みやき町の公開講座に協力し、センターより講師を派遣した。

ク)ウェブサイトを開示し、センター事業の紹介や研究成果の発表を行った。

ケ)産学官連携事業「地域の歴史文化調査研究協力事業」のもと、県内自治体や民間団体との歴史文化面における交流・協力をすすめた。

コ)中国の研究者との国際シンポジウムを後援した。

サ)佐賀県教育委員会と共催で講演会「発掘された佐賀ー発掘成果速報 2017ー」を開催した。また講演会にあわせ、発掘品の展示会を開催した。

〈自己評価〉

展示・講演会・公開講座の開催による研究成果の市民・地域社会への還元など、本年度も大きな成果をあげることができた。また国際交流については、国際シンポジウムを後援し、中国など海外研究者との交流をすすめた。ただ研究とあわせ、イベントなどの学外・市民向け告知が不十分であり、今後の課題である。

(4)組織運営

ア)平成 30 年 3 月現在専任教員 2 名、併任教員 4 名、特命教員 6 名、教務補佐員 1 名、事務補佐員 1 名、非常勤研究員 1 名を配置し、センター長を中心とした円滑な組織運営・研究活動に努めている。また、文化教育学部や全学教育機構、附属図書館等、他部局との連携も進めている。

イ)各学部から選任された委員、附属図書館長・総合情報基盤センター長など本センターの業務に関わる部局の部局長など学長が必要と認めた委員、本センター長・副センター長・専任教員・部門長により構成する運営委員会(学部の教授会に相当)を3回開催し、センター運営に関わる事案の審議を行った。

ウ)センター専任・併任教員による会議を2ヶ月に1度開催し、センターの運営について検討した。

エ)所蔵図書・資料の増加による菊楠シュライバー館の狭隘化、および火災から貴重資料を守るため、理工学部 3 号館に研究室を借用し、書庫・作業・会議スペースとして活用した。なお 29 年度より芳尾記念ラボ・応接室に移転したほか、教養 1 号館に新たに書庫用の部屋を確保し、貴重資料を移転した。

〈自己評価〉

組織運営はこれまで同様円滑にすすめることができた。火災対応については、シュライバー館外に書庫を確保した事により、貴重資料については安全な保管が可能となった。また防災・安全意識を教職員に徹底する事により、施設面での課題の補完につとめた。

佐賀大学地域学歴史文化研究センター 29 年度事業に関する意見

所属等 久留米大学文学部教授

氏名 吉田 洋一

佐賀大学地域学歴史文化研究センターの 29 年度の事業について、以下の通り見解・意見を述べる。

1) 教育活動

センターは専任教員が学内で授業を担当し、公開講座・古文書講座・講演会を開催するなど精力的に教育活動をすすめている。今後、センターの研究成果を活かした活動をよりすすめてほしい。

2) 研究活動

専任教員を中心に着実に研究成果を挙げており、学会および地域社会に研究成果を発信し、評価を得ている。今後は外部研究者との共同研究を、すすめる必要がある。

3) 国際交流・地域貢献

地域貢献は展示・出版・講座・講演会など多様な成果を挙げており、高く評価できる。国際交流については、地域の特性を生かした国際的研究の進展を希望する。

4) 組織運営

少人数ながら着実な組織運営が行われている。